

日英語感情述語における〔感情〕と〔感情表出〕

日英語の感情述語については、日本語では一人称主語をのぞく二人称・三人称主語が容認されにくいのに対して英語では全ての人称が基本的に容認されることが先行研究で広く知られている（池上 2005; 神尾 1990, 1998, 2002; Kuroda 1973; Lyons 1982）：

- (1) a. (私ハ) 嬉シイ／悲シイ
b. ??アナタハ 嬉シイ／悲シイ
c. ??彼(女)ハ 嬉シイ／悲シイ

- (2) a. I am happy/sad.
b. You are happy/sad.
c. S/He is happy/sad.

(池上 2005: 2)

ただし、日本語でも感情動詞および「心理形容詞+がる」により派生される動詞形式では(1)のような人称制限が緩められる：

- (3) a. (私は) うれしがっている／悲しんでいる／怒っている
b. ?あなたは うれしがっている／悲しんでいる／怒っている
c. 彼／彼女は うれしがっている／悲しんでいる／怒っている

こうした事実については、複数の説明が提案されている：e.g., 自己投入／自己分裂の相違（池上 2005）、事実の標示／状態の表出の相違（Kuroda 1973）、内的述語／外的述語の相違（澤田 1993, 2004）。しかし、感情述語の意味が日英語で異なっている可能性は検討されていなかった。

一般に、感情述語の表す意味には経験者に生じる〔主観的感情〕とその外面的なあらわれである〔感情表出〕とを区別できる（杉岡（2007）の提示する [+SUBJECTIVE] と [+EXPRESSIVE] を踏襲）。前者は経験者にしか知りえないが後者は第三者が観察できる。

英語の感情形容詞にはこの両方の意味要素が含まれているのに対し、日本語の感情形容詞には〔主観的感情〕だけがあると考えられる。これは次のようなテストで確かめられる：

テスト 1. 知覚動詞「みる」や 'see' の補文に生起できるか：

- (4) a. #私は[彼が悲しい／嬉しい／楽しい]のを見たことがない¹
b. 私は[彼が悲しんでいる／嬉しがっている／楽しんでいる]のを見たことがない
(5) I never saw him {sad / happy / angry / #glad}.

テスト 2. 「(主語) が ____ のを写真に撮った」あるいは 'take some pictures of [(Subject)

¹ #は意味のおかしさを示す。

being ____' という文脈に生起できるか：

- (6) a. #ビデオレターをみていたとき、父はぼくが {悲しい／嬉しい／楽しい} のを写真に撮った
b. ビデオレターをみていたとき、父はぼくが {悲しんでいる／楽しんでいる／怒っている} のを写真に撮った
- (7) Dad took some pictures of me being {sad / happy / angry / glad} when I was watching the video letter.

知覚対象になったり写真に撮れるのは観察可能なものだけである。上記のテストからは、英語の感情形容詞には [感情表出] があるのに対して、日本語の感情形容詞にはそれが無いことがわかる。また (6)a-b の対比は日本語の感情動詞にも [感情表出] があることを示す。

英語の感情形容詞や日本語の感情動詞が [主観的感情] と [感情表出] の両方を表しうるとして、語彙的に符号化されている概念はどのようなものだろうか。もし [主観的感情] と [感情表出] の一方のみを表せるのであれば、たとえば「楽しいー楽しむ」「悲しいー悲しむ」のペアでは次のように矛盾なく言えるはずであるが、実際には矛盾が生じる：

- (8) a. #太郎は (遊園地が) 楽しくないのに、楽しんでいる。
b. #太郎は (愛犬の死が) 悲しくないのに、悲しんでいる。
- (9) a. #太郎は内心では (遊園地が) 楽しいが、楽しんではいない。
b. #太郎は内心では (愛犬の死が) 悲しいが、悲しんではいない。

以上から、「楽しいー楽しむ」「悲しいー悲しむ」のペアに関しては、[主観的感情] と [感情表出] がともに義務的に表されていることが示唆される。この点は、「心理形容詞+がる」の動詞形式と対照的である：

- (10) a. 太郎は内心では (愛犬の死が) 悲しいが、悲しがってはいない。
b. 太郎は内心では (愛犬の死が) 悲しくないのに、悲しがっている。

このように、感情動詞には [主観的感情] と [感情表出] とを一体のものとして表すものと、[主観的感情] から分離可能なものとして [感情表出] を表すものが確認できる。

興味深いことに、[感情表出] が存在する場合には3人称主語が容認されやすくなるという相関が認められる。このことは、日本語と英語とに共通の認識論的・語用論的な規則（観察し得ない他者の感情については直接に断定できない）を仮定したまま、もっぱら語彙的な意味の相違によって人称制限の相違が説明しうることを示唆する。

主要参考文献

- Croft, William & Cruse, Alan 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan 2004. *Meaning in Language* (2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- 本多啓 2009. 「他者理解における『内』と『外』」, 坪内・早瀬・和田 (eds.) 『「内」と「外」の言語学』. 東京: 開拓社.
- 池上嘉彦 2005. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」, 『認知言語学論考』 No.4: pp. 1-60.
- Jackendoff, Ray 2007. *Language, Consciousness, and Culture*. Mass.: MIT Press.
- 神尾昭雄 1998. 「情報のなわ張り理論: 基礎から最近の発展まで」, 中右実=編 『談話と情報構造』. 東京: 研究社.
- 2002. 『続・情報のなわ張り理論』. 東京: 大修館書店.
- Kuroda, S.-Y 1973. “Where epistemology, style, and grammar meet: A case study from Japanese,” in Stephen R. Anderson & Paul Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt, Rinehart and Winston.
- Lyons, John R. 1982. “Deixis and Subjectivity: Loquor, ergo sum?,” in R. J. Jarvella & W. Klein (eds.), *Speech, Place, and Action*, pp.101-124. John Wiley & Sons.
- Martin, Samuel E. 1975. *A Reference Grammar of Japanese*. Yale UP.
- Parsons, Terence 1990. *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*. MIT Press.
- Russell, Bertrand 1940. *An Inquiry into Meaning and Truth*. G. Allen.
- 杉岡洋子 1991. 「心理述語についての考察」, 『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 24 号: pp. 361-373.
- 2007. 「主観的事象表現と複雑述語形成」, 『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 38 号: 21-43.
- 澤田治美 1993. 『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.
- 2004. 「『たい／たがる』の主語の人称制限をめぐって——認知言語学的アプローチ」, 『言語』 vol.33, no. 10: pp.74-80.
- 内田聖二 2004. 「メタ表象と日本語」, 『言語』 vol.33, no.6: pp.79-86.